

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号： 9 9 9 9 9
研究種目： 奨励研究
研究期間： 2022 ~ 2022
課題番号： 2 0 H 0 0 6 7 7
研究課題名 『繪事瑣言』の成立とその背景

研究代表者

査名 弘美 (KUTSUNA, HIROMI)

つくば市教育局文化財課・会計年度任用職員

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 360,000 円

研究成果の概要：本研究では、これまで日本で重要視されていなかった、中国で1799年に刊行された絵画技法材料書『繪事瑣言』の成立の背景と、著者であるサク朗（1747 - 1813）について文献調査を行った。当初、2020年度の研究として申請し採択されたが、2022年度に研究が行われた。2021年に上海書画出版社より《繪事瑣言 繪事雕蟲 三万六千頃湖中画船録》が出版され、中国に渡航せず研究を進めることが可能になった。日本には、ほぼ同時代の「皆春齋御繪具」が存在している。これらの顔料や東洋絵画の近代化の研究に、詳細に顔料の性質と技法が述べられている『繪事瑣言』が、新たな視点をもたらすと期待できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『繪事瑣言』は、画の視覚表現や精神性に関する記述が中心であった中国の画論書の歴史において、材料とその用法を主に構成された初めての著作である。1756年頃に刊行された『小山畫譜』と比較すると、約40年の時間的隔たりと社会的階層の差が反映され、近代化の兆しとその前夜の画家の手元の画材と志向を読み取ることができる。筆者の臘脂の復元研究において、本書の記述は重要な根拠となったが、本書の文献学的な確実性等は不確かなままであった。本研究以降は、古代から続く色料が産業革命の余波に消される前夜の様相を、サク朗の視点から捉え直すことができる。同様に、他の材料や技法の研究にも、本書は寄与できると考える。

研究分野： 絵画技法材料

キーワード： 絵画技法材料 東洋絵画 顔料 清末

1. 研究の目的

本研究は、18世紀末の中国の絵画技法書『繪事瑣言』（かいじさげん）の成立とその背景について、明らかにすることが目的である。筆者は、臙脂という中国由来の色料を復元する研究において、本書の記述を大いに参考にしたが、本書に言及した日本の研究はなく、中国でも度々論文や現代の絵画技法材料書に引用されているが、本書の内容とその成立についての研究はわずかであった。

本書の書誌学的確実性や、成立の背景が明らかになれば、特徴的な絵画技法書として、美術史の研究だけでなく、絵画や彩色の修復等に活用できると考えられる。

2. 研究成果

(1) 東京国立博物館蔵『繪事瑣言』について

本書は明瞭な版本が、東京国立博物館に所蔵されている。東博本は、中国やハーバード大に存在する版本とほぼ同じ版面であり、版元は同じく「雨金堂」（未詳）であることが、熟覧により確認された。ただ、巻末に「嘉慶丙子天中節前二日 孔南池表弟贈 陳錫堃」と識語がある（嘉慶丙子は1816年）。また、「昭和26年1月26日」の受け入れ印があり、全八巻が帙に収められていた。

(2) 中国書畫基本叢書《繪事瑣言 繪事雕蟲 三万六千頃湖中画船録》について

2021年5月に、中国書畫基本叢書《繪事瑣言 繪事雕蟲 三万六千頃湖中画船録》が上海書画出版社から発行された。サク朗の著作、事績を収集し整理した書籍で、中国に現存する版本と写本をもとに、標点と校勘が付されている。東博本との比較、調査した書籍の数量、綿密な点校から本書を、サク朗と《繪事瑣言》の研究において重要な基本文献としてよいと考える。

(3) 『繪事瑣言』の著者について

著者のサク（Unicode：U+8FEE）朗（1747-1813）は、字が蘊高、号を汜川といい、江蘇呉江（現在の蘇州市呉江区）に生まれた。幼少期を「太湖三萬六千頃，洞庭七十有三隙，吾郷之風景如斯，客郎之夢懷在此」と、風光明媚な江南で過ごしたと追憶している。幼少期より文才を認められ、乾隆39年（1774）到北京へ上り、四庫全書編纂の四庫館で謄録官として筆写に従事した。1782年に四庫全書が完成した後も北京に留まり、1786年に南へ帰った。1789年に再び北方へ赴き、順天郷試を受験し、挙人となる。その後、任官しつつ中国の様々な地方を漫遊し、1797年に『繪事瑣言』を著す。本書には、四庫全書の筆写に従事した経験と、おそらく北京や各地の文人との交流により得た材料や技法の知識が反映されているとみてよい。

(3) 『繪事瑣言』の成立背景と今後の課題。

本書の成立より半世紀前に同じ江蘇省の出身の宮廷画家、鄒一桂（1686 - 1772）が1756年頃に『小山畫譜』を著している。両者の時代と環境の差による技法材料に関する記述の相違は、今後の研究課題である。

また、『繪事瑣言』の記述を精査するために、皆春齋御絵具の調査研究結果との比較検討も、発展的な課題として研究を継続していきたい。『繪事瑣言』と、江戸後期～幕末の日本絵画の関係は未踏の問題であるが、双方の傾向を追うことで、中国と日本の絵画の近代化を考察する材料を得られるのではと考える。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------